

巻末資料

音楽分野の外部人材による学校現場への参画レポート（1）

外部人材活用事業(音楽/声楽)

林 真衣

私はこの度、文科省委託の「学校教育における外部人材活用事業」の一環として、大阪教育大学附属天王寺小学校(10月、11月)と、大阪市立西中島小学校(12月から3月まで)へ授業サポートをしに行き参りました。

活動内容に入る前に少し、私自身のことについて触れることにします。大学生時代、私はどちらかという子供が「苦手」な学生でした。子供たちとどう触れ合えば良いか分からず、子供のことを少し「怖い」とさえ思っていました。在学中、教員免許取得の一環として、母校へ教育実習にいかせていただいたものの、当時は「生徒の前に立つ教師として、完璧に振る舞わなければならない」と、必要以上に自分に圧力をかけてしまい、生徒と打ち解けることが出来ず、ついには授業を行うことにとつてもない恐怖心を抱いてしまい、期間を最後まで終える事ができませんでした。それからしばらくは「教えること・子供たちと関わること」からは距離を置き、自分自身が演奏することに集中していたのですが、今年度の4月から専門学校への仕事をいただいた事をきっかけに、少しずつ、教えることに向き合うようになっていきました。そんな中、大阪教育大学芸術講座の中務晴之先生から今回の事業のことをお聞きし、この度の事業が「専門分野で活躍する人材が教育現場に携わる時、どういう関わり方ができるか、また、どういったことが課題になるかをモニターとして検証する」ものだと聞き、教育現場に一度携わり、自分自身に課題を感じた身として何か役に立てるのではないかと、志願することにしました。

大阪教育大学附属天王寺小学校では、学芸会での演奏に向けた指導サポートを主な仕事として活動しました。1年生・3年生・5年生が演奏を発表するという事だったので、その3学年の授業に入り、後半は主に1年生の授業に入っていました。5年生の授業内では平原綾香・藤澤ノリマサの「Sailing my life(ベートーヴェンの「ピアノソナタ第8番 悲壮」の旋律に日本語の歌詞をつけたもの)」やベートーヴェンの「交響曲第9番」の有名なフレーズ”Freude schöner gütterfunken...”の部分を見本として児童たちの前で演奏させていただきました。演奏の指導サポートとしては、先生が授業を進めていく中、児童一人一人を見ながら、助けが必要そうな子達にアドバイスを、というものでした。声かけをしていく中で、一番課題と感じたのが「児童理解が不足していること」でした。具体例としては、5年生の授業中に一部の児童が「ちゃんとリコーダーを吹かない」と周りの子たちから注意を受けている場面があり、「先生、ちゃんと吹いているかみてあげて」と言われみていたのですが、

同じところを間違えて覚えている子がいて、その子に指摘をするものの、何度言ってもなおる事はありませんでした。また別のシーンでは、個人練習の時間にアコーディオンの子に対して「一回聞かせてくれる？」といったところ、「イヤ！」と言われてしまい、そのまま練習時間が終わってしまった、ということもありました。また1年生の授業中にはオルガンが苦手な児童がいて、その子の練習に付き合っていたら、他の弾ける女の子から「その子ばかりずるい！こっちにも来て！」と苦手な子の練習を中断してそちらに向かう、という場面もありました。他にも一人で鍵盤ハーモニカを練習している子の隣でアドバイスをすると、急に練習をやめてしまって恥ずかしそうに俯いてしまった、というシーンもありました。音や演奏方法に対する指摘をしても、指摘をしたからすぐできるようになる、というものでもなくて、児童一人一人の性格や得意・不得意を考えてアドバイスしなくてはならないのだなど、その時改めて気づきました。

附属天王寺小学校での活動を通して、日頃その年代の子供たちと接する時間が少ない分、その年代の子たちに対する理解が乏しく、児童理解が不足していることを課題に感じました。そんな中、附属天王寺小学校の先生と児童とのやりとりを観察する中で、「児童一人一人の良い所と悪い所を見つける事が児童理解につながる」と感じ、西中島小学校での活動はそのことに焦点を置いて過ごすよう、心がけました。

附属天王寺小学校では、児童たちと触れ合うのは音楽の授業のみでしたが、西中島小学校では、校長先生のお計らいで、音楽以外の授業や給食、掃除、休み時間や登校時のあいさつ運動など、ほとんど1日中、子供たちと関わる事ができました。活動内容としては様々で、音楽の授業サポート(合奏時の個人アドバイスや合唱時のピアノ伴奏補佐)の他にも、実際に歌唱指導を行ったり、急遽体調不良になられた先生の代わりに一時間授業をさせてもらったこともありました。

音楽の授業時は、児童たちの音楽に対する癖を理解するよう努めました。例えば楽譜を読むのが苦手な子は、楽譜を読む時にどうやって読んでいるのかを理解する、という風に。3年生の音楽の授業で、音符についての授業を行った時、音名(ドレミ)を書いた音階の表を見比べながら「エーデルワイス」の合奏譜に音名を書いてもらう、という取り組みを行いました。何度かサポートで入るうちに、楽譜を読むのが苦手な女の子を見つけていたのですが、その時、その女の子が音符についた線の長さで音を判断しようとしていることに気がつき、「音符についでる線じゃなくで、玉がどこにあるかをみた方が、なんの音かわかりやすいよ」とアドバイスし、その後何度か一緒に音符を読むうちに、次第に少しずつ、一人でも読めるようになっていきました。他にも、これはどの学年にも共通して言える事なのですが、「休符を“無いもの”として扱う」子が多いように感じていて、合奏時、休符でリズム感がずれてしまう事が多々ありましたが、休符にも長さがあることを実際見本を見せて何度もやるうちに、理解してくれる児童もいました。

私は、指導時の個人的な課題として、子供たち(特に小学校低学年)に対して、「難解な言葉選びをしてしまう」事が課題だと感じていました。今回の活動に関わらず、よく「説明が

分かり辛い」「言葉選びが堅い」と言われる事がこれまでもあったのですが、今回1年生へ「詩の内容をイメージしながら歌うようにする」をテーマに歌唱指導を行なった際にも、西中島小学校の先生から「もっと子供たちが想像しやすいように簡単な言葉で、それに加えて体を使って表現したりして理解を促してあげたらどうか」とアドバイスを受けました。それを踏まえて、また別の時間で「響きのある“歌声”を出す」というテーマで歌唱指導を行なった際には、体を実際に使いながら指導をするよう心がけました。具体的には、まず声が響いていると言うことを1年生のみんなに理解してもらうため、両手で頬を包みながら少し高めの声で「ホー」と声を出してもらい、その際に普通に話しているときより手の振動がたくさんになることを感じてもらいました。「手が震えてるのがわかる？」と聞くと何人かの子がすかさず「わかる！」と伝えてくれて、その後担任の先生の計らいで一人ずつ歌声を披露してくれたのですが、話し声と違って裏声での歌唱ができている子が何人か増えていました。

西中島小学校での経験で、音楽の授業時間外や休み時間に子供たちと関わることで、より子供たちの性格を身近に感じる事ができました。音楽の授業で見せる顔と他の教科で見せる顔、そして休み時間に見せる顔がそれぞれ違って(もちろんどの場面でも同じ顔の子もいるのですが)、より多くの顔を知っていく事が、児童理解につながるのだなと言うことに、今回の活動を通して気づく事ができました。今回そのことに気づけた事は、自分にとって、とても良い発見だったと思います。私は、音楽や歌うことに関して専門的な知識を身に付け、それを自分自身で行うことは好きなのですが、それを人に教えると言うことは、苦手意識から、あまり好きになれずにいました。ですが今回の活動で得た気づきは、苦手意識を克服する一歩だと感じています。

また、身に付けた専門知識を、子供たちに教えるためには、また違う技術が必要なのだと感じており、あくまでも学校現場は人間教育の場であって、専門技術を身に付けるところではない、とも思いました。けれど、子供たちはそれぞれの資質を持っていて、より専門的な指導をすれば確実に伸びる子がいることも確かで、できる事が増えればその分野のことが楽しくなってくる。その学びの楽しさが、人間教育につながることもあるのではないかと、今回の活動を通して感じました。西中島小学校の活動では、授業の終わりに毎回、音楽の教科の先生と来週どんなことをしていけば良いかを少し話し合うのですが、現場の先生と私たちのような外部人材が、意見を出し合い話し合いながら授業を作っていく事が、児童たちにとっても私たち大人側にとっても、学びのある良い授業作りになれば良いなと思っています。活動は3月中旬までまだ続きますが、最後までこの貴重な経験を楽しみながら過ごすことができればと思っています。

最後にはなりましたが、この貴重な経験を与えていただいた事、そして、活動にあたり手を尽くしてくださった皆様に、心より深く感謝いたします。

音楽分野の外部人材による学校現場への参画レポート（2）

外部人材講師の活動について

下村 伊都

私はトランペットを専攻しており、大阪教育大学芸術専攻音楽コースを卒業後、主に音楽活動や音楽指導を中心に活動をしています。実際の学校現場での指導経験はほとんどなく、音楽教室でのトランペットの奏法指導のみ経験があります。

今回は、普段音楽活動等に携わる外部人材が学校現場に参画するための能力や課題を明らかにするため、音楽分野の外部人材講師として附属天王寺小学校と西中島小学校の音楽の授業に参加しました。

附属天王寺小学校では11月末にある学芸会に向けて、10月から1年生、3年生、5年生の合唱と合奏の授業に参加し、主に合奏のサポートをしました。各学年の授業では、楽譜の読み方やリズム指導、楽器奏法などを中心にアドバイスやサポートをしました。その中で、児童の集中力の保ち方や限られた授業内に多くの児童の音を聴けるような時間配分を取ることが難しく課題だと感じました。全体の進度を合わせるために多くの児童の音を聴きアドバイスをするために、児童複数人で一齐に演奏してもらい、音を聴いて確認、指導するように工夫しました。また児童一人一人によって理解しやすい声かけやアドバイスがそれぞれ変わることとても実感しました。音符を一緒に歌ったり、リズムに合わせて手を叩いたり、木琴で叩く場所を見て覚える児童もおり、とてもさまざまであったのでなるべく多くの伝え方ができるように、伝え方の種類や声かけの仕方を工夫することの大切さを学びました。そして、附属天王寺小学校で驚いたことは、多くの児童が自宅での練習や、朝の登校後などにも練習している姿に、学芸会への気持ちや音楽が好きな気持ちをすごく感じました。また、前回の授業よりできるようになった部分があると聴かせてくれる姿にはすごく感動しました。

各学年の先生方の授業に参加し、先生方のキャラクターや学年、クラスの雰囲気に合わせて授業づくりがとても学びになりました。1年生は、静かにするとき、楽器の音を鳴らさないときなどに、先生の見せる絵によって自分たちで静かにしたり、楽器を鳴らすことを止めたりなど、自分たちで気づくことの大切さを学べるような指導方法であったり、3年生は楽器ごとにリズム作りをしたり、曲の終わり方や叩き方をクラス全員で考え、自分たちのアイデアを活かせるような音楽づくりをしておられました。5年生は、一回一回の演奏を大切に取るような声かけをされており、先生の言葉がけで児童の表情や演奏が大きく変化することを実感しました。

西中島小学校では、12月から全学年の音楽の授業と、4年生、5年生、6年生は特に卒業式に向けて合唱の練習のサポートをしました。低学年は歌と鍵盤ハーモニカ、またリコーダーの演奏を行っており、伴奏演奏での補助や楽器奏法のアドバイスをしました。楽譜や音

符の資料なども作成し、少しでも楽譜が読める児童が増えるように努めました。特に低学年では、授業の中に楽しめるようなゲーム性などを持たせた内容の方がより反応が良く、授業内容の工夫やメリハリが必要だと実感しました。高学年では、楽器の叩き方や声の出し方などを中心にサポートをしました。合唱と合奏ともに少し専門的な指導の方が興味を持っていただき、すぐに実行しようとする姿勢がより見られたことが大きな発見になりました。卒業式の練習では、声の出し方と歌詞に合わせた表現ができるよう工夫しました。どんな声をどこに向けて声を届けるのかなどを具体的にアドバイスをし、また身体を使って強く歌うところは手を大きく広げ、弱く歌うところは手を小さくたたむなど、目に見える形で表し、その手の動きに合わせて歌うことで、歌声の強弱の出し方を表現できるよう工夫しました。

西中島小学校の先生方は、児童一人ひとりのことをよく知られており、サポートが必要なことから児童自身で頑張れることをしっかりと把握されている姿が印象的でした。どのような場面でも児童一人ひとりの名前をしっかりと呼び、向き合っている姿を近くで見て、音楽活動や指導をする中で欠けていた部分だと実感し、大変学ぶことができました。

今回の外部人材の事業を通して、音楽活動の中では経験できなかったようなことや、気づきが多くありました。音楽教室や学校のクラブ指導などで行なうレッスンとは大きく違い、学校現場ではクラスや学年単位で音楽を奏でることの難しさや指導方法なども工夫や経験が必要であると感じました。私が今まで行なってきた専門楽器のレッスンや指導では、多くが楽器の奏法や技術向上で、その技術を生かした曲への取り組み、そして音楽的な曲想の指導を行なっておりました。ですが、学校の音楽の授業の中では技術向上だけではなく、全員で一つの音楽にすることや音を聴くということ、音楽をどう感じたのか、何を考えたのかななどの発見や知覚・感受がとても大切であり、学校音楽での大きな学びではないかと感じました。そう感じたきっかけは、音楽の授業の中で私の専攻楽器であるトランペットと、同じように参加しておられた声楽の先生と演奏する機会をいただきました。どんな音が鳴るのか、どんな曲が吹けるのか、そして私たちがどのようなことを考え、演奏しているのかを発表しました。その時の児童の新しいものを見るようなまなざしや、自分もやってみたいという好奇心、こんなこともできるのかという発見を私自身が間近に感じることができました。そして、楽器や歌声を聴いた後の音楽に対する姿勢や、技術、音楽性にも違いが表れました。私は、これが身近に音楽を聴くことができ、質問や感想をいえる環境だからこそその知覚・感受ではないかと感じました。ですので、技術向上のための指導や音楽表現のサポートだけではなく、聴いて感じたことを自身で自由に表現することが最も大切ではないかと感じました。よって私は今回のサポートをさせていただいた中で、聴いたものを感じる力や表現する力を少しでも高めることができるようなサポートができればと考え、取り組ませていただきました。そして、外部人材は自身の専門楽器や分野を知覚・感受の材料として学校授業で生かされると、児童にとって新しい刺激のある授業になるのではないかと感じました。

これからのさまざまな教育事業が多くの子どもたちの糧になるよう心より願っております。この度は、このような貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。